

1月は寒い中での新年のスタートであり、水温2～3度の奥山の沢では、ナガレタゴガエルの繁殖活動の時期でもあります。

私は、あきる野の生物多様性や、自然環境の状況などを5年間にわたって調査した上で、生物が生息できるビオトープづくりや稀少種の保護、外来種対策などに関わってきました。その結果、限られた地域ではありますが、自然環境が向上していることが明確に確認されました。私は、これらの活動を含め、あきる野での自然環境保全活動の支援をもっと広い範囲で行いたいと思っています。

あきる野の森林面積は、市域の約6割となっており、その内7割以上はスギ・ヒノキ林です。植林から長い年月をかけて成長した森まで、さまざまな人工林を見てきた中で、やはりスギ・ヒノキ林では暮らせない生物が多く、基本的にこれらの生物は、雑木林や草原などを選んで活動しています。昆虫を始め、暗くて植生のない林床が苦手な爬虫類や両生類、冬鳥などは、特に手入れ不足で長年放置されたスギ・ヒノキ林に現れることは少ないようです。これらの仲間や木の実などを捕食する小型哺乳類や猛禽類などもあまり見ることはできません。

スギ・ヒノキ林は比較的野生動物にあまり利用され



ないことはよく知られていますが、実は環境によって「暮らせる」もしくは「暮らすようになった」動物がいます。それは、「理想的な環境ではありませんが、環境に適応して暮らす」という例が多いのではないかと思います。その中で、現況のスギ・ヒノキ林を最も利用する動物は意外と中型・大型の哺乳類です。雑木林と違って季節に伴う変化がなく、一年中、暗くて静かな環境は、民家のすぐそばにも広がり、野生動物の隠れ場となっています。

山で餌が足りなければ、境界がなくなった人間の世界に食べ物を求めて動物が出没してしまいます。餌が少なく、隠れる場所の多い環境は、人と野生動物の共生において一つの課題でもあります。花粉対策や保水力の向上なども含めた大きな環境課題として受け止め、今後の森づくりに取り組む必要があります。

人と野生動物の共生に向けて、理想的な自然環境を取り戻すための対策は急がなければならないと感じています。

(パブロ)